

2. 岡田隆介:児童虐待と児童相談所、金剛出版、2002
3. 内閣府「青少年白書」青少年の現状と施策、2004
4. 松原達哉:子どもの危険信号、日本教育新聞社、1996
5. 松原達哉:いじめの実態とその対策に関する研究、立正大学石橋湛山記念基金  
研究費助成費 研究成果報告書、1997
6. 松原達哉:学校・学級不適應に対応するカウンセリング、学事出版、2000
7. 松原達哉:スクールカウンセラーと連携した指導、教育開発研究所、2002
8. 森嶋昭伸:文部科学省による不登校理解の変遷、臨床心理学:25(1)、2005

### IV-3 子どもと教師の関係

家庭での子どもは、親の背中を見て育つと言うが、学校においては当然ながら子どもは、教師との関係が重要であり、ある場合には、決定的な意味を持つことがある。それほど教師の役割は、子どもの学校教育上大きい。しかし、2001年に国立教育政策研究所が中心となって、7000人規模の多くの教師からのアンケート結果にもあるように、75%以上の教師が教科によって子どもたちの習熟度に差がありすぎると感じているし、65%の教師はどうしても授業に集中できない子どもがいることに悩んでいるのである。そこで、本項では子どもと教師の関係についてできるだけ冷静に検討する。

#### (1) 最近の子どもたちの数と質

##### 1) 子どもの数の減少傾向

全国的に少子化が進んでいる。図IV-1に示すように、1948年以降で、小学生と中学生の数のピークは、第1次、第2次ベビーブームの影響を受けて、それぞれ1958年と1981年、および1962年と1986年に生じたが、その後漸減しており、2003年には、全国の小学生は723万人、中学生375万人である。小学生の数で言えば、これは、1958年の54%および1981年の61%であり、中学生では、1962年の51%および1986年の61%である[1]。言い換えれば、1935年には、総人口6,925万人に対し、子ども人口(0歳—14歳)は2,555万人で36.9%を占めていたが、1998年には、総人口12,635万人に対し、子ども人口は1,918万人で15.2%に過ぎないことを示している[2]。1学級および1教員あたりの児童数も減少してきている(図IV-2)。

##### 2) 子どもたちの「質」の変化

このような少子化傾向の中で、子どもたちはどのように変化しているのだろうか。特徴的なことは次のように分類される[2,3]。①心の通い合いの低下、②対立のない親子関係だが、親にはかなわないと思っている、③大人は恐くもないし、尊敬の対象でもないと思っている、④必要な体力・知力が劣っている、⑤子どもたちは疲れている、⑥学校は楽しいが、塾にも行かなければならない、⑦子どもたちの規範意識が薄れている、⑧ジェンダー感覚が広がっている。以上のうちの、⑧を除いてはネガティブな方向へ

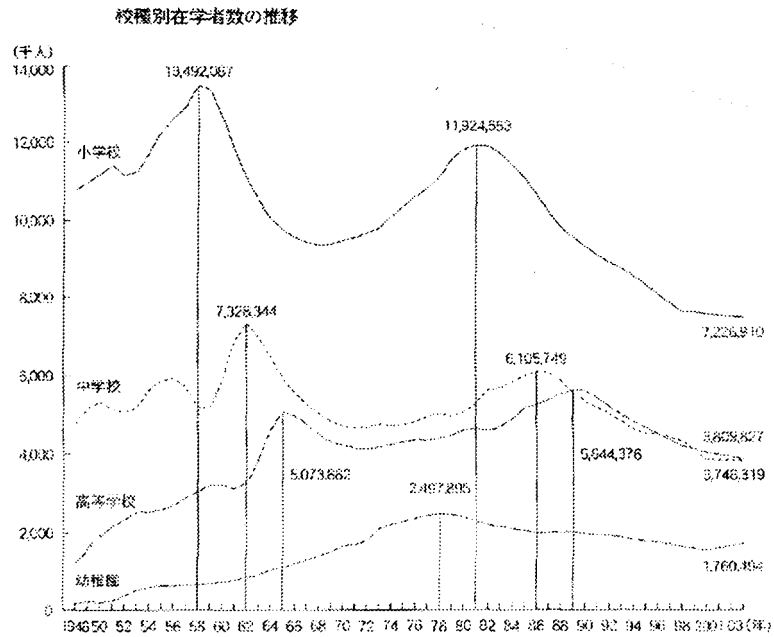
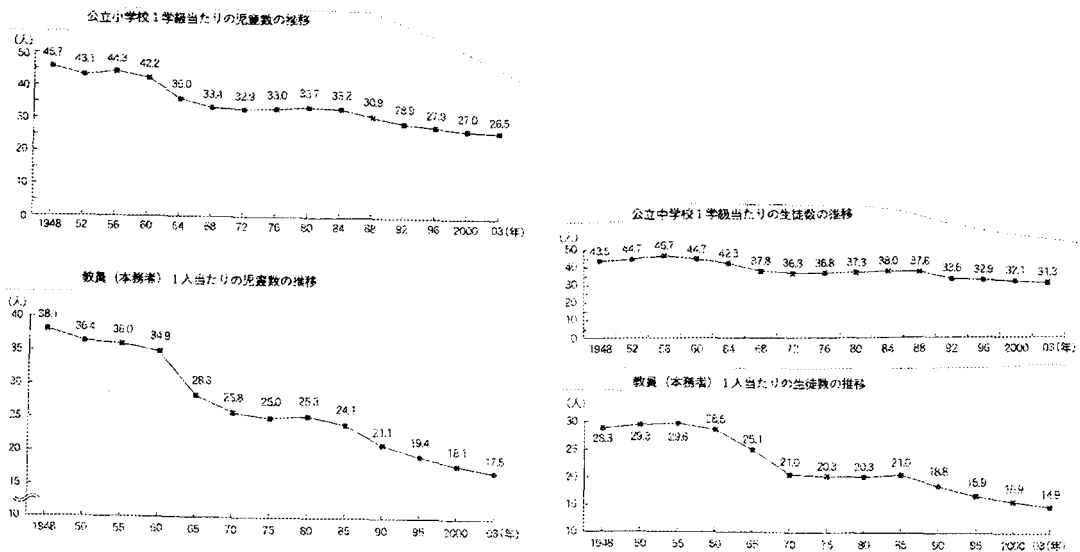


図 IV-1 校種別在学者数の推移[1]



(a) 公立小学校

(b) 公立中学校

図 IV-2 児童・生徒の数の変化 [1] 小・中学校とも毎年減少してきている。

態度や意識が変化しているが、それは、そのまま大人社会の反映とも考えられる。子どもは忠実に社会の変化を受けており、それゆえにこそ、学校、家庭、地域の連携によって子どもの成長を育むことが必要である。

(2) 子どもの成長のための学校の役割 — 子どもは学校、教師をどうみているのか  
上記のように、学校、家庭、地域の連携によって子どもの成長を育むことが必要で

あるが、そのうち、学校での教育が最も重要であることはもちろんである。小学校・中学校で人格形成がなされることを考えれば、そこでの初等・中等教育の重要性は言を俟たない。小学校・中学校での教育の目指すものは、学力の向上によって、子どもが内面的に成長し、大人になる準備をすることである[4]。

子どもの学力の向上は、安定した授業ができるかどうかにかかっている。教員を対象に調査した結果、「学級がうまく機能しない」のは、小学校 5 年生であることがわかった。そこで、国立教育政策研究所の調査「小学校における学級の機能変容と再生過程に関する総合的研究」では、小学校 5 年生の授業がうまく機能しない要因を児童の視点から調べることを試みた[5]。この調査は、2001 年 3 月に全国の 295 校の小学 5 年生 14,884 人(男子 7543 人、女子 7341 人)から得た回答に基づいている。以下はその結果である。

まず、授業についての受け取り方は、「授業は楽しい」と感じている児童の割合は、全体の 71.6%であったが、一方「全く楽しくない」と感じている児童は 6.6%を占めた。「授業内容をだいたい理解している」児童 84.8%に対して、「全く理解していない」児童が 2.1%いた。「もっと難しいことを勉強したい」という回答は 35.5%にとどまった。「先生の授業はわかり易いか」に対しては「そう思う」が 86.9%を占めたが、「全くそう思わない」が 2.6%もいた。

学級の状況を詳しく調べるために、「授業中に立ち歩く人がいるか」、「授業が始まってから教室に入らない人がいるか」、「授業中におしゃべりをしたり、手紙をまわす人がいるか」、「授業中に先生を困らせても平気な人がいるか」という 4 項目の問題行動を起こす児童がいる割合を点数化し、「学校健康度」(以下、「健康度」と呼ぶ)を定義した。その結果、①健康度と学校所在地(都市部、町村部)との相関はない、②学級規模が大きいほど健康度は低い、③教員の性別、年齢、勤続年数と健康度の関係に有意差はないが、担任の持ち上がりがあった学級の健康度は高い、ことがわかった。

また、問題行動に対する児童一人一人の意識を点数化し、「授業に関する規範意識」との相関を調べると、児童の規範意識が形成されていないと、問題行動を起こす可能性が高くなり、「授業がうまく機能しない状況」に陥った場合には、さらにその状況を悪化させる行動をとるようになる。

授業の理解度と「健康度」は、明らかに相関関係があり、「授業が楽しい」、「授業の内容がだいたいわかっている」、「先生の授業はわかり易い」という回答が多いのは「健康度」の高い学級である。すなわち、「健康度」が高い学級では、「授業が楽しい」という児童の割合は 76.9%あるのに対し、「健康度」が中および低い学級では、それぞれ 71.5%、66.8%である。「いじわるな児童が少ない(「健康度」が高い)学級では、「先生の言うことは大体正しい」と思っている児童が多い。従って、小学校 5 年以降、児童間の学力差が鮮明になり、授業について行けなくなった児童が授業に参加しなかったり、問題行動を起こしたりする結果、学級がうまく機能しなくなるのではないと思われる。教師は、児童に授業の内容を理解させ、学習意欲を高めるだけでなく、授業の楽しさ

をわからせ、心理的な満足感を与えることが重要である。子どもが授業の中で達成感を味わい、自己肯定感をもとに意欲を高めてゆくのが教育の基本であろう[4]。

この調査でもわかるように、児童は教師をよく観察しており、冷静に評価している。教師は自分一人だけで学級を良くしようとするのではなく、児童を信頼し、その健全なエネルギーをうまく利用することが重要である。本調査は、(1)授業をうまく機能させるためには児童に満足感を与えることが重要であること、(2)担任教師への信頼感の有無が学級経営に大きな影響を与えていること、と結論している[5]。教師は、教科の内容をやさしく教えることが必要である。しかし、それは授業のレベルを下げるということではない。単にレベルを下げるだけだと、必ず子どもたちから信用されなくなる。子どもの成長のために、教師間の協力と切磋琢磨が重要であることは言うまでもない。

### (3) 学校や教師の子どもとの接し方

#### 1) 教師のあり方

教師は、子どもとどう接しているのか(どう接するべきなのか)、という点について、日本教育会が2001年5月に同会員に行なったアンケート結果(回答数181)は、次のようであった[6]。

##### ①教師に望まれる資質

表IV-3に示すように、教職への情熱・使命感、豊かな人間性、子どもへの愛情、責任感が上位を占める。「体験の重視」、「教育実習の充実」という意見も目立つ。

##### ②教師に必要な能力

表IV-4は教師に必要な能力を示し、教科の指導力、子どもを掌握する力、生活指導に関する指導力が上位を占める。「教育実習生を指導できる力」、「体験活動を指導できる力」も必要と思われる。これらのことは、全く当然のことであるが、当然のことをいかに実践して行くかが問題である。一つの可能性は、「自己診断シート」を作ることである。暴力、薬物乱用、煙草等を含む規範意識の向上もその中に含まれるだろう。

#### 2) いくつかの事例

教師が、子どもと同じ目線でコミュニケーションを図ろうとしていることは確かである。東京都目黒区立東山小学校での道徳公開授業を参観したところ、「友人との信頼感」をテーマにして、先生の問いかけに対し、子どもが答え、それをみんなで考えてゆくという双方向のやり方が行われていた。特徴は、良く言えば「友達のような言葉遣い」であるが、年配の人からは「先生に対して、友達同士のようなぞんざいな言葉づかいをしていて、尊敬の念など生まれるはずがない。昔、先生に畏怖ある気持をもっていたのは、日ごろ先生に敬語で接していたからだ。今の子どもたちには全く怖いものがなくなっている。全国の小学校低学年の先生に、ぜひ正しい日本語と敬語を子どもたちに教えるようお願いしたい。」(読者からの新聞投書)という反論が出る。

単に敬語を教え込むことでは、決して子どもは納得しない。最近の子どもの特徴として、「納得して行動する」と傾向がある。したがって、教師も親も、子どもに「なぜこの

表 IV-3 教師に望まれる資質 [6]

選択項目	校種別選択数						選択数 合計	選択総数 に対する 比率
	幼稚園	小学校	中学校	高校	盲聾養	不明		
教職への情熱・使命感	7	39	42	35	6	2	131	24.3
子どもへの愛情	3	26	21	15	1	2	68	12.6
豊かな人間性	5	36	27	19	4	2	93	17.3
社会性		12	5	4			21	3.9
豊かな感性	6	9	7	6	2		30	5.6
思いやりの心		1	1	1	1		4	0.7
人間尊重・人権尊重の精神	3	6	7	6	2	2	26	4.8
奉仕の精神		1	2			1	4	0.7
ボランティア		3	2			2	7	1.3
社会・集団における規範意識	2	10	8	4	5		29	5.4
歴史や文化の尊重			1	2			3	0.6
探究心		3	2	4			9	1.7
好奇心				1			1	0.2
創造力		8	10	4	1		23	4.3
責任感	1	11	15	6	3		36	6.7
公正さ		1	2	1			4	0.7
協調性	1	8	17	3			29	5.4
柔軟性		3	3				6	1.1
素直さ		3		2			5	0.9
粘り強さ	1	4	2	2			9	1.7
合計							538	99.9

行動が必要なのか」をよく理解させることが重要になる[7]。これは「昔の」子どもには無かった特質だろうと思う。その点で、「今の子ども」は「昔の子ども」よりずっと成熟している感がある。これは、社会情勢にもよるものであろうが、子どもにとって教師は、自然と尊敬が湧いてくるような関係であるべきであろう。では、それはどういう努

表 IV-4 教師に必要な能力 [6]

選択項目	校種別選択数						選択数 合計	選択総数 に対する 比率
	幼稚園	小学校	中学校	高校	盲聾養	不明		
教職の意義・ 役割への正確 な知識	2	12	6	9	2	2	33	6.2
教科の専門的 知識		6	4	9	1	1	21	4.0
教科の指導力	5	40	33	31	4	3	116	21.8
生活指導に関 する指導力	1	13	16	17	5	1	53	10.0
カウンセリング 能力	4	22	8	3	2		39	7.3
子どもを掌握 する力	5	23	17	11	1	1	58	10.9
子どもを生か す力	1	15	17	6	2		41	7.7
事務処理能力	1		2	1			4	0.8
困難な事態の 処理能力	1	8	9	3	1	1	23	4.3
応用力	3	1	2	1			7	1.3
課題解決力	10	10	6	1	1		28	5.3
豊かな表現力	1	11	8	3	1		24	4.5
人間関係構築 力	2	16	16	11	3	3	51	9.6
継続的自己教 育力	1	12	5	8	5	2	33	6.2
合 計							531	99.9

力によって確立されるのであろうか。

例えば、京都市立新林小学校では、子どもの学力を伸ばすために「基礎・基本の重視」、「学習規律の確立」、「教師の授業改善」を三位一体のものとして取り組み、「読み・書き・計算」の力、「話す・聞く」力を高める授業がその目標を達成できるものであることを実証した。特に、授業中は教師自身もていねい語を使うことにより、子どもたちに「他人との関係を正確に意識させる」ことによって、「大人への離陸を準備させる」とのこ

とである[5]。

教師にとって、児童理解は学力向上と社会性の向上(生活指導)のために必須のことである。このことは、各学校で行われていて、例えば、島根県松江市立津田小学校では、①日常生活場面での子どもたちとのふれあいや対話の中で、積極的な声かけ、書くこと・描くこと・話すこと・歌うことを通しての理解、②スクールカウンセラーとの連携をも含めて、特設場面での教育相談で子どもと教師との信頼を深める努力、等がなされている[8]。東京都目黒区立東山小学校では、子どもの意識に関する分析(自己意識、日常生活意識、自然界に対する意識、社会・労働に対する意識、文化・行政に関する意識)を、児童一人一人について行いつつある。このことによって、子どもの行動を理解し、健全な発達の支援をすることができる。

### 3)外国の小学校の例

前記、津田小学校と児童間交流を行っているアメリカ合衆国ワシントン特別区パークビュー(Park View)小学校の場合、他のアメリカの学校と同様、教師は、決められたカリキュラムに従って毎日の授業をするが、特別に問題のある子どもには、その子どもたちの必要に応じて特別の授業を行っている[9]。ESL(English Second Language)を担当する教師は、クラス担当の教師を補助して英語を十分に使えない子どもたちの教育にあたる。このような教師は、年に3回ほど親との会合を行い、それぞれの子どもの発達記録を確認することになっている。課外授業として聖書クラブがあるのは、日本とは相違するところである。

子どもは、多くの場合、教師を権威あるものと見ているが、同時に、教師が彼らの学習をお膳立てしてくれるものと思っている。多くの子どもは、自分たちが言うことに教師が耳を傾け、何か問題があるときは解決してくれようとしていると感じている。

教師は、会議、IEP や子どもの記録を見ること、家庭訪問、共通テストをすること等、あらゆる方法で子どもを知ろうとする。親と教師の会合(PTA)は、それらを総合するものとして位置づけられている。驚くべきことは、教師が自分のポケットマネーで、子どもたちの文房具等を買っていることである。衣類や靴等も買い与えたり、朝食や昼食も一緒にして子どもたちに学習をさせていることも多い。放課後も、宿題やゲーム等を助ける場合も多い。サマーキャンプやスペースキャンプに参加する子どもに資金を出す教師もいる。こうした状況の中で、教師の活動を困難にしていることは次のようなものである:時間と経費の不足、一部の親の子どもへの無関心、子どもへの親としての接触不足。パークビュー小学校では、子どもの進歩をデータで計るシステムをとっているが、その際の障害は、何割かの子どもをある学習レベルからより高いレベルに移す際に、一人一人の子どもについての学習能力とニーズを勘案するには、時間がどうしても不足することである。子どもと教師の関係を考えるとき、家庭と地域の役割は、非常に重要である。様々な理由があるのだろうが、往々にして、親は子どもの学習の進歩具合に関心を払わない。そのようなとき、地域が補助的役割を果たすのが望ましい。

#### (4) 子どもと教師の関係に関する今後の方向性

1)学校の果たすべき役割は、子どもの学力の向上および社会性の向上(生活指導)である。教師は、学力向上のために授業のやり方を工夫し、子どもに達成感・自己肯定感を味わわせることにより、子どもの意欲を高める努力をせねばならない。

2)子どもの特質は、時代とともに変わってきているので、教師は一方向的に教え、押し付けるのではなく、子どもとの対話による双方向教育の実をあげるのが望ましい。

3)子どもの健全な育成のためには、学校、家庭、地域の3者が協力しなければならない。そのために、学校の教師は常に保護者および地域関係者と交流をもつべきである。

#### ☆引用文献

1. 清水一彦他(編):最新教育データブック[第10版]、時事通信社、2004
2. 清水健一:「心」の教育と大人たち—コミュニケーションと自己責任の時代—  
東 京都多摩教育事務所研修会資料、2000
3. 深谷和子:子どもはどう変わったか—最近の子ども像を探る、日本教育、6—9頁、  
2001
4. 久保 齋:学力づくりで学校を変える、子どもの未来社、2002
5. 内藤 学:児童の満足感が授業安定のカギに、内外教育、2—4頁、2003
6. 日本教育会:「教員養成」に関するアンケート、日本教育、6—21頁、2001
7. 東京都目黒区立東山小学校道徳授業地区公開講座協議会:道徳公開授業資  
料、2004
8. 錦織 明:島根県松江市立津田小学校 2004 年度教育相談について、2004
9. Larkin, M. J., Bulach, C. R.: A comparison of caring behaviors for special  
education teachers versus regular education teachers, Eastern Educational  
Research Association Conference, 2001

#### IV-4 子どもの体験学習

現代の子ども達の置かれている状況は、次の宮崎駿の言葉[1]に象徴される。『宮崎の怒りはアニメ産業を安易に称揚する日本社会そのものにも向かった。「ビデオで“となりのトトロ”をみる時間があったら、どれだけ豊かな現実を体験できるか。ビデオを売る僕の矛盾でもあるが、大人がまじめに論じるべきことだ」「美術館では母親は携帯電話をかけ、子供はゲームをしている。パソコンのキーはたたけても、火が付けられない。子供がバランスをもって育つ空間がない。』

子ども達がバランスをもって育つことのできる空間が、現代の日本ではどんどん少なくなっている。それに伴って、様々なひずみが子ども達の世界に入り込んでいる。その中で一番の問題は、かつての子ども達が当然のこととして体験できたことが、現在で



は体験できなくなってしまうことである。このことは多くの人たちから指摘されながら、抜本的な解決策が提示されないままになっている。そして、そのひずみの解決が、一方的に初等・中等教育の現場に押しつけられてしまっていることが、教育の混乱に拍車をかけている。

### (1) 遊びの変質 ―集団の遊びから個の遊びへ―

50代以上の大人の多くは、小さい頃に家の近くで、集団で遊んだ体験を有している。それは、異なる年齢の子ども達からなる集団であり、年長の子どもは幼い子どもの世話をする必要があった。喧嘩が起これば仲裁をし、また、仲直りをする術を集団の遊びのなかで学習していった。さらに、こうした集団での様々な遊びが、地域ごとに受け継がれていた。ときには人が足りず、ときには人が多すぎて目的の遊びができないときには、皆で遊ぶための工夫を必要とした。また、遊びで思わぬけがをすることもあり、ちょっとしたけがに対しては、適切な処置も口伝えに受け継がれていた。こうした集団での遊びの場所は、近くの路地であり、空き地であった。こうした子ども達の集団での遊びは、人間関係を築く基礎となり、大人になる準備としても機能していた。基本的な体験ができる場が地域にかつてはこのように備えられていた。

大都市に人口が集中し、核家族が増える以前には、家庭では年寄りが子ども達の面倒を見る中で、ときには昔話を通して、生活していく上での智慧をそれとなく教えることが多かった。また、地域で年寄りが子ども達の相手をすることもあった。しかし、年寄りと子どもは、多くの場合一緒に暮らすことがなくなり、子どもが年寄りから学ぶことができなくなってしまった。

しかも、車社会の出現によって、路地は遊び場としての機能をなくし、テレビの出現は、集団で遊ばなくても、時間をつぶすことを可能にした。さらに、テレビゲームの普及によって、皆がテレビのディスプレイを見てゲームに熱中し、互いの顔を見て遊ぶ事がなくなってしまった。このようにして、集団での遊びはほとんど姿を消し、子ども達の間で伝えられてきた遊びもほとんど消滅してしまった。

現在進行している事態は、子どもの世界に限っても人類の歴史上全くなかった新しい状況を生み出している。それは子ども達の社会でさえも、過去との断絶を生み出し、従来であれば自然に身につく多くのものが、その多くは社会生活をおくる上で基礎をなすものであるが、大人が積極的に教えない限り身につかなくなってしまう。

### (2) 子どもを取り巻く自然環境・社会環境の貧しさ

冒頭で引用した宮崎駿のことに、子ども達が「火が付けられない」ことが指摘されている。実際には、大人であっても火を自らつける生活から遠ざかってしまっている。ガスも自動点火が普通となり、電気しか使わない台所も普及してきている。こうした環境で子供が育てば、火を直接見る機会は、バースデーケーキのろうそくだけでも知れない。そうなれば、火が熱いという感覚さえもが身につかなくなる危険性がある。現在

の台所は湯が沸騰している状態を見えにくくしている。事実、大学生の合宿で、ゆで卵をつくるのに、熱湯に手を入れようとしたという事例をときおり耳にする。

また、大学での実験で熱したフラスコを冷たいテーブルの上に直接置いて、フラスコが破裂し怪我をした例がある。耐熱ガラス器具が普及した現在、ガラスに急激な熱の変化を与えると割れるという現象は理解できないかも知れない。50年前の貧しい日本では日常生活で使うガラスの質は悪く、ちょっとした熱の変化で簡単にガラスが割れた。今のガラスは昔に比べればはるかに壊れにくくなっている。しかも、生活環境が向上するにつれて、多くのものがブラックボックス化してしまう。かつてのように工夫する必要がなくなり、生活の知恵を学ぶ環境はなくなってしまった。

このように、普通ではない非常事態が起こった時に、それに対処するための生活の知恵が薄れてくるという状況が生じるのは、仕方がないことである。しかしながら、火は使い方を誤れば火事になる危険があること、熱湯はやけどをする危険があること、刃物で身体を傷つけば痛いことなど、原始的ではあるが真に大切なことは、体験を通して伝えていく仕組みを、社会は常にもつ必要がある。このような原始的なことは、かつては教えるまでもないことであった。しかし、現在ではこのようなことさえ、子ども達は自然に体験できる環境にはない。

学びに関しても同様のことが指摘できる。江戸時代を通して数学の入門書としてベストセラーであった「塵劫記」(初版 1641年)では、身近にある題材を使って、興味ある問題を作っていた。しかし、類似の問題を現在の日本に求めようとするとき非常に困難に直面する。たとえば、杉算とか杉なり算とか呼ばれる問題がある。名前の由来は、積まれた杉の丸太の本数を求める問題であったが、「塵劫記」では当時身近にあった、積んだ俵を数える問題に変わっている。数学的には、 $1+2+\dots+n$  を求める問題であるが、俵が添られている方が、単なる式の問題より考え易くなり、興味も湧く(図IV-3)。これと類似の問題を作ろうとして、現在の日本で俵に替わる身近にあるものを探してもなかなか見つからない。便利になったことは、子どもにとってよい環境になったとは限らない例である。

それは、おもちゃに関しても同じである。かつては、こわれたおもちゃを分解して、ぜんまいと歯車の不思議な結びつきや、はずみ車の仕組みに驚嘆することができ、また簡単な故障は自分で直すこともできた。しかし、すべてが IC チップ化した現在の高級なおもちゃは、分解してもその仕組みは全く分からなくなっている。時計も同様である。かつては、壊れた時計のふたを開けて、中のたくさんの歯車の巧妙な組み合わせに感嘆することができた。このように、おもちゃの表面的な豊かさは、子どもにとっては必ずしも豊かな世界を保証するものではない。

ところで、最近、子どもの世界で奇妙な現象が報告されている[2],[3]。とりわけ正司[2]による報告は衝撃的である(図IV-4)。プールのような川が描かれたり、腕がな

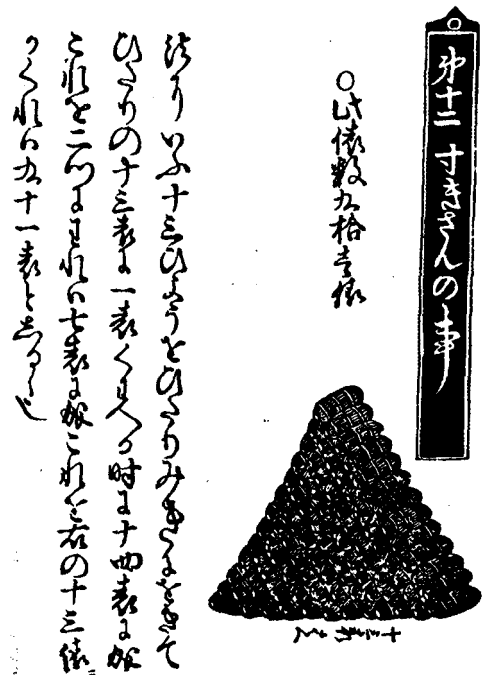
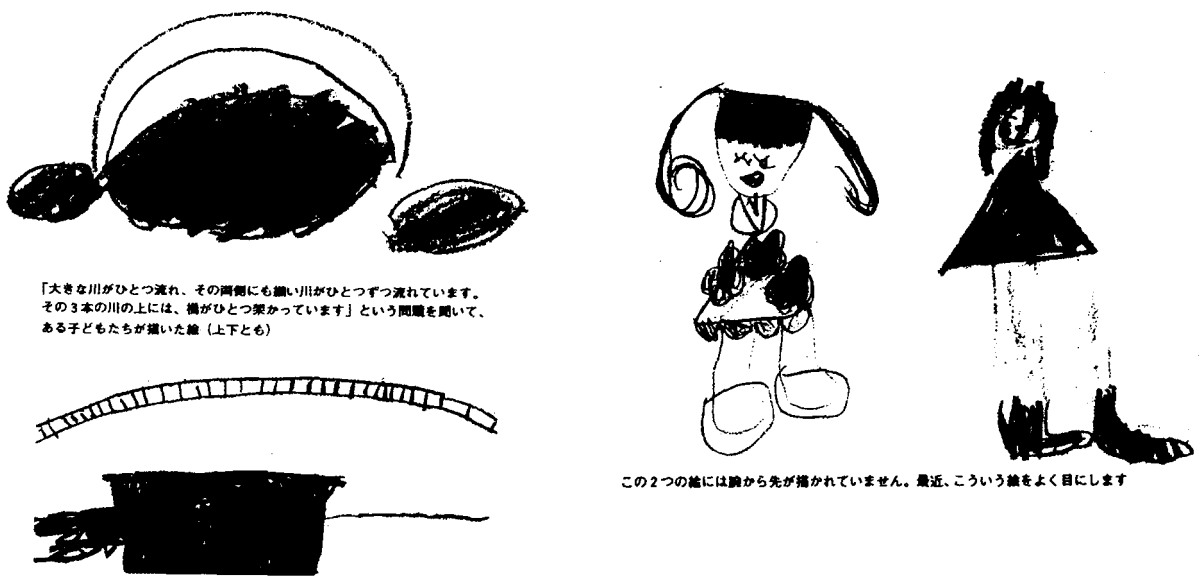


図 IV-3 吉田光由著「塵劫記」上巻 第12「杉算のこと」より。  
 現在ではあまり見ない『俵』が図に描かれている。



「大きな川がひとつ流れ、その両側にも細い川がひとつずつ流れています。その3本の川の上には、橋がひとつ架かっています」という問題を聞いて、ある子どもたちが描いた絵（上下とも）

この2つの絵には顔から先が描かれていません。最近、こういう絵をよく目にします

図 IV-4 正司昌子著「幼児の知力がぐんぐん伸びる本」[2]より。  
 プールのような川（左図）、腕のない子ども（右図）が画かれている。

い子どもが描かれた幼児の絵が示されている。これらの絵は普通の幼児達の絵であるという。その原因が何であるのかは、はっきりしないが、一部分にだけ関心が集中し、

全体像を把握することが希薄になっているように思われる。子ども達をとりまく環境からの影響があることは想像に難くない。

### (3) 体験と疑似体験

このように、貧しくなった子ども達の世界をますます貧しくしているのが映像の氾濫、特にテレビである。2003年に行われた国際数学・理科教育動向調査(TIMSS2003)の結果をみても、日本の中学2年生のテレビやビデオを見る時間の平均は一日2.7時間と世界のトップであり、一方、宿題をする時間は1時間、楽しみのために本を読む時間は0.9時間と世界の最低レベルである[4]。テレビの映像は、うまく活用すれば、教育上の効果も大きい、危うさも秘めている。例えば、テレビで見たことを実際に体験したものと勘違いする。つまり、真の体験と疑似体験の区別ができなくなってしまうことがあるからである。豊かな実体験があつて、はじめて疑似体験が生きてくる。疑似体験ばかりではそれを生かすことができない。上述したように、日本の子ども達は貧しい環境に置かれており、日本の社会が、積極的に子ども達に真に重要な基本的な実体験できる場を用意する必要がある。

そのこともあり、特に小学校では体験学習が盛んに行われている。しかしそこでは、多くの場合、体験がプログラム化されており、子どもにとって重要な「冒険」はなかなか実現しない。子ども達の安全を考える限り、学校でできることは自ずと制限されるからである。そうしたことから、家庭での取り組みが重要になってくるが、核家族化され、共働きが多い家庭の現状では、それも難しいのが現状である。新たな社会的な仕掛けが必要とされている。

### (4) 体験の知的総合化

しかしながら、どのような豊かな体験もそれだけでは十分な意味を持たない。体験は何らかの意味で抽象化され、知的な営みの中に組み込まれ、他者と共有していく必要がある。個々の体験を統合し、それらの体験の背後にある様々な意味を学ぶ姿勢が重要である。そのことによって、全く新しい状況に直面したときに、過去の体験を生かして対処できるようになる。体験を単なる体験で終わらせてしまつては、真の意味での教育にはならない。教育の本質の一つは、個々人のそれまでの体験をもとに、新しい状況に対して適切な対応をすることのできる力をつけることである。この観点は、残念ながら、日本の教育では十分に理論化されていないように思われる。学習指導要領に新しく導入された「総合的な学習の時間」では、特に多くの小学校で体験活動を重視した取り組みが行われているが、単なる体験で終わつてしまつている場合が多い。たとえば、環境問題を取りあげ、学校の近くの空き缶拾いを行つて、それ以上の意味を追求しない例を目にする。世界中に人達がそれぞれ空き缶を一つ捨てるのと全体でどれくらいの量になるのか、それらの空き缶の原料はどのくらいの量になるかを考えるだけでも、空き缶拾いの体験を越えて、学びが深まっていき、環境問題のもつ意味を、